琉球大学学術リポジトリ

米国管理下の南西諸島状況雑件　沖縄関係技術援助(1)（昭和34・35年度）

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2019-02-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: -
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/43515

CONFIDENTIAL

General Ideas of the Japanese Government
Concerning
Economic and Technical Assistance
to the Japanese Inhabitants in the Ryukyu Islands

Taking into consideration the desire of the Japanese inhabitants of the Ryukyu islands, the authorities concerned of the Japanese Government have in mind the following general ideas to contribute to the promotion of the welfare and the economic advancement of the inhabitants, cooperating with the United States Government in pursuing its policy aiming at the said purposes as pronounced in the joint communique of President Eisenhower and Prime Minister Kishi of June 21, 1957 and without interfering with the power of the United States over the islands stipulated in Article 3 of the Peace Treaty:

(a) to send technical experts and to provide necessary materials to contribute to the development of local industries and to the rehabilitation of the islands.

(b) to establish in Japan a corporation of which the capital would be shared by the Government and the private sector. This corporation would purchase such special products of the Ryukyu islands as black sugar and pine-apple and process and sell them in Japan and also would make investment to help local industries.

(c)

(c) to send Japanese teachers having much experience in education for training teachers of the islands.

(d) to send technical experts on family registration and to help towns and villages of the islands, in order to expedite the restoration of Ryukyuan family register books, which were completely destroyed due to the war, and also to promote knowledge and efficiency of Ryukyuan officials in such field, and to facilitate coordination between corresponding registrations in Japan and the Ryukyu islands in such cases as marriage, adoption, or transfer of permanent domicile, etc.

Remarks: If there would be no objection on the part of the United States Government, legislation and budgetary appropriation necessary for such ideas would be sought for the next fiscal year.

電信写

昭和三三一六九二五　平

岸大臣臨時代理

（慶山ダレス第一回会談に関する件）

第二二五号（別電大至急）

（以下別紙英文）

配布先

大臣、次官、官房長、局部長、参事官、次官、欧亜局長、東亜局長、北米課長、保護国課長、啓蒙宣伝課長、

外務省

本　ワシントン　九月二二日六〇五発米北

朝　海　大　使　二二日〇六三五着

電信写

(第二二五号の二)

The Secretary of State and the Foreign Minister of Japan met together at the Department of State this afternoon and had a constructive exchange of a views in an atmosphere of cordiality and mutual understanding. They reviewed the international situation, discussed Japanese- American security arrangements and took up other matters pending between their two countries. Others present at the meeting included Ambassador Asakai, Ambassador MacArthur, Assistant Secretary Robertson, Assistant Secretary (Defense) Sprague and General Lemnitzer.

Security problems facing the two countries were discussed. It was agreed that the Japanese-American Committee on Security, whose establishment was agreed upon in the talks between President Eisenhower and Prime Minister Kishi last year, had been successful in strengthening mutual cooperation and understanding in the security field. Foreign Minister Fujiyama pointed out at the same time that seven years have passed since the United States-Japan Security Treaty

外務省

電信写

(第二二五号の三)

was signed and that with the re-established position of Japan in the intervening years the situation has now evolved to the point where it would be advantageous to re-examine the present security arrangements with a view to adjusting them on a basis entirely consistent with the new era in relations between the two countries a ffirmed by Prime Minister Kishi and President Eisenhower in the Joint Communique of June 22, 1957. It was agreed that the two governments will consult further on this matter through diplomatic channels following Mr. Fujiyama's return to Tokyo.

外務省

電信写

With respect to the Ryukyu Islands, Foreign minister Fujiyama welcomed the current discussions taking place between the United States authorities and Ryukyuan representatives looking toward a satisfactory resolution of the land problem. Secretary Dulles expressed his understanding of this Japanese interest in the Ryukyus and it was agreed that on Ryukyuan matters the two governments would continue to exchange views through diplomatic channels.

The Foreign Minister also touched upon specific issues among which was include the Japanese desire for compensation of former inhabitants of the Bonin Islands who are unable to return to their former homes. The Secretary assured Mr. Fujiyama that the United States was sympathetically aware of the problem and is studying it carefully in the hope of achieving a reasonable solution.

外務省

(第二二五号の三)

昭和三十三年九月十二日
妹山うらいち 共同声明

1958 9. 12 読売

9/12 読売

小笠原補償検討約す

共同声明

【ワシントン十一日発＝AP】十二日の藤山・ダレス会談の共同声明全文は次の通り。

ダレス国務長官と藤山外相は十二日午後米国務省で会見、親愛な相互理解の空気の中で建設的な意見の交換を行なった。両者は国際情勢を検討し、日米安全保障条約一つき話合い、両国間のその他の懸案の諸問題をも取上げた。会談には、朝雨駐米大使、マッカーサー駐日大使、ロバートソン国務次官補、スプレーグ国防次官補、レムニツァー陸軍参謀次長が同席した。

この日の話合いでは、両国の当面する安全保障問題が主として取上げられた。昨年のアイゼンハワー大統領・岸首相会談で設置に同意をみた日米安全保障委員会は、安全保障の分野で相互の協力と理解を強めるのに成功したという点で両者は意見が一致した。藤山外相は同時に、日米安保条約の調印以来七か年を経過したことを指摘その間に日本の地位が回復したことにかんがみ、今や情勢は現行の安全保障取決めを再検討し、岸首相、アイゼンハワー大統領が一九五七年六月二十二日の共同コミュニケで確認した両国関係の新時代に完全に合致する基盤に立って、これらを調整することが有益と考えられるにいたったとのべた。

両国政府は藤山外相の帰国後、この問題を外交経路を通じてさらに協議することに同意した。

琉球諸島に関しては、藤山外相は現在アメリカ当局と琉球側代表が土地問題の調査すべき話合いを敬迎さいで行なっている話合いを歓迎した。ダレス長官は日本が琉球に対して有する関心に理解を表明し琉球問題について両国が今後も外交経路を通じ意見の交換を続けることに同意した。

藤山外相はさらにその他の諸問題にも触れたが、その中に小笠原島が不可能な旧小笠原島民への補償にたいする日本の希望もふくまれている。ダレス長官はアメリカがこの問題に同情をもっており、妥当な解決に達することを期待して目下慎重に検討中であることを明らかにした。会談は十二日も続行される。

亜北米七六〇号

昭和三十三年九月六日

外務大臣臨時代理

内閣總理大臣　岸　信介

在アメリカ合衆国

特命全权大使　朝海　浩一郎　殿

沖縄、小笠原問題に関する資料送付の件

沖縄、小笠原問題に関する三宅参事官、菅沼北東アジア課長の在日米大使館「ハーツ」一等書記官との会談要旨を別添のとおり参考までに送付する。

九月三日

（二）

極秘

まで

沖縄問題に関する三宅参事官菅沼課長のハーツ一等書記官との会談要旨

八月三十日、小笠原補償問題に関し、米大使館ハーツ書記官を招致し、三宅及び菅沼より、わが方の要求額についての基本的な考え方、計算の根拠等を説明した次第については、先に、報告済みのところ、小笠原問題に入るに先立ち「ハ」より次の如くサジェスチョンがあつた。

昨日、「マ」大使から外務大臣に対して、日本側が考えてゐられる沖縄に対する経済的、技術的な協力のアイデイアそのものは結構と思う。問題はその進め方にあるのであつて、「マ」大使としては、大臣訪米の際に、ダレス長官に対し、この問題の大筋を話されて、しかる後通常の外交ルートの折衝に委ねられるのが適当であると考えている。日本側のアイデイアは、沖縄に対する米国の管轄権なり施政権の問題をインボルブすると

となく、日本が沖縄の日本人の福祉をヘルプするというレジデイメイト・コンサーンのあらわれであり、至極尤もな要望であると考えるが、本件を、この際松野長官より、現地でブース長官に直接話されることは、現地の司令官が極めて限られた軍事上の権限しか有していないことから、見て、将又、現地軍当局の気持からして、適当な方法とは考えられない。ついては右のサジェスチョンに対する日本側の考え方を伺いたし、と述べたので、三宅より、上司にも報告の上お知らせすべしと答えた。

三、大臣御訪米の際、本件に関してダレス長官との別添会談要領案に付大臣及び次官の御決裁を得たので、右に関連して、九月三日「ハ」書記官を招致し、三宅及び菅沼より別添の英文「沖縄住民に対する経済及び技術援助に関するジェネラル・アイデイア」を手交するとともにハーツの伝えた「マ」大使のワヂェスチィオンに対する回答として、三宅より大臣がダレス長官と会談される際の沖縄問題に関する発言要領の概略説明したところ「ハ」は「現在の段階でも」云々と述べられることは、国防省に対し、日本側の計画が施政権の返還を前提とした段階的な措置であるとの誤解を起さしめるおそれあり、大臣が発言せらるるとすれば(a)日本は沖縄の施政権の早期返還を要望する。(b)しかしながら日本は現状においては右が可能ではないことを認める。(c)従つて日本は米国の施政権に干渉することなく、又、施政権の返還を意味することなく、沖縄住民に対する、経済的、技術

的援助の形式に於て、住民に対する正当なる関心を表明したい。という風に話されること然るべし、と述べたので三宅及び菅沼よりわが方の国内事情特に対国会関係の問題をよく説明し、大臣がその通り云われるや否やは保証の限りでないが、会談要領中には、「・・・施政権が日本に回復される時期が出来るだけ早く到来することを希望するがそれはさておいて（セッテングアサイド）・・・」と書いてあり、これなら差支なかるべしと述べたところ、「ハ」もそれならば大へん結構であると述べた。

なお、別添英文については、「ハ」は、(b)の項目は始めて何う次第なるも、政府出資ということだと日本が沖縄に対して何かオーソリティをもつことになるとか、或は米国の施政権に日本政府が干渉するというような印象を与うべく、この点問題があろうと述べたので、三宅より一応本会社は日本に設立される

ものであることを強調しおき米側懸念の理由なかるべきことを説明し、但し米側において異議があれば削除することも可能なる旨答えたが「ハ」は削除については特にインシストしなかつた。

亜北米七五一号

昭和三十三年九月四日

外務大臣臨時代理

内閣総理大臣　岸　信介

在アメリカ合衆国

特命全権大使　朝海　浩一郎　殿

沖縄、小笠原問題に関する資料送付の件

一、沖縄及び小笠原補償問題に関する藤山大臣のクレス長官との会談要領（別添甲及び乙）は参考までに送付する。

二、別添乙、沖縄問題に関する会談要領中、わが方が、アメリカ合衆国の沖縄に対して有する施政権に干渉することなくして、沖縄住民の福祉と経済発展を図るとのアメリカ合衆国の方針に協力するうんぬんの点に関しては、総理府特別地域連絡局（前の南方連絡事務局が改称したもの）が目下研究中の四項目にわたる沖縄住民に対する日本国政府の経済、技術援助計画をわが方のジェネラル・アイディアとして、別添丙英文のとおり取りまとめ、九月三日事務当局をして在本邦アメリカ合衆国大使館係官に対し右英文Ⅱを手交の上説明せしめたから、お含みまで。